

水稲うるち新設銘柄 作り手と買い手の思いは如何に

令和4年産新規設定銘柄は31登録「にじのきらめき」が躍進

読者の皆様は全国に自治体が奨励している水稲うるち粳及び玄米の産地品種銘柄（東京都除く）は必須銘柄と選択銘柄で合わせて何銘柄あるかご存じでしょうか？実に令和4年は313品種数、道府県において必須銘柄は255、選択銘柄は666と合計921銘柄にのぼっている。昨年と比較すると、新規設定数は31、廃止は3とあり昨年よりも28登録数が伸びている結果となっている。新規設定された銘柄は北から順に青森県「はれわたり」、山形県「ゆうだい21」、茨城県「つきあかり」、栃木県「縁結び」「にじのきらめき」、埼玉県「大粒ダイヤ」、福井県「五百川」「ふくむすめ」、岐阜県「岐系207号」、静岡県「にじのきらめき」、愛知県「あいちのこころ」「にじのきらめき」、三重県「大粒ダイヤ」「にじのきらめき」、滋賀県「亜細亜のかおり」「大粒ダイヤ」「つくばSD1号」、京都府「きぬむすめ」、大阪府「恋の予感」「てんたかく」、和歌山県「にじのきらめき」、鳥取県「あきだわら」、島根県「つきあかり」、岡山県「にじのきらめき」、広島県「いのちの壺」、高知県「たちはるか」「とよめき」、福岡県「とくだわら」、長崎県「恋初めし」、大分県「なつほのか」、宮崎県「ほしじるし」となっている。

まん延防止等重点措置が解除され、飲食の時短制限や入場者制限の緩和など経済を回すべくwithコロナの生活が模索されてきている。幸いにも新型コロナウイルス感染者数は全国で減少に転じてきているがゴールデンウィークが控えているのでまだ予断は許さないが1日も早く外食・中食需要がコロナ禍以前までに回復しないと米の消費はダブついたままだ。令和4年産は3年産と同じく米価は低迷するといった予測がある中で本年度産主食用の生産量はより一層抑えざるを得ないはずなのだが、31もの新設銘柄が登録されているのには驚いた。新設のなかでも特に「にじのきらめき」については令和4年産にて新たに5県において新設登録されている。その他に複数県で新設登録となった銘柄は「大粒ダイヤ」で3県、「つきあかり」は2県登録されている。「大粒ダイヤ」は名前の通り玄米千粒重が30gと大粒の品種で滋賀県のトオツカ種苗園芸が育種権を持ち、(株)神明が集荷販売面で業務用中心に寿司原料やどんぶり用原料として2018年に共同取組を開始している。「にじのきらめき」「つきあかり」は農研機構が開発した品種で「にじのきらめき」は2018年に登録され令和3年までの3年で6県、「つきあかり」は2016年の登録後に令和3年までの5年で13県において新規設定され、この2品種においてはコロナ禍で米ビジネスが苦戦する中にきら星のごとく逆行し作付面積が広がっている。新規設定銘柄として取り上げられるまでには単年度での申請は認められないもので、少なくとも新規設定されるまでに3年間はその県において検査実績がないと申請は下りない。よって、生産者や集荷側の思惑が一致しないと広がりは見せられないのだ。コシヒカリのように全国でどこでも作付されている超優良品種と肩を並べるようになるかはこれからの推移を見守るところだが、コロナ禍においてこの数年での広がりには優秀だと言えよう。

両銘柄が生産拡大を見せているのには訳があるようだ。「にじのきらめき」はコシヒカリよりも収穫期は3～5日遅いのだが、特長として短稈で玄米千粒重は28g程度、収量も10俵近く取れ、且つ高温障害に強く良食味という生産者が追い求めてきた品種であり、今年度一気に複数県で拡大した所以だ。「つきあかり」は「コシヒカリ」より1週間熟期が早く玄米千粒重は28g、冷めてもおいしい良食味米である。ただし、一番作付面積が大きい新潟県ではここ数年、出穂期に高温にぶつかる乳白米になりやすく等級を落としている原因となっており欠点はあるものの栽培の癖さえ掴めれば収量も多収できる。両品種共に王者コシヒカリと比較して食味で対抗でき、且つ生産者メリットとしてはコシヒカリよりも収量増や高温耐性等で秀でたところもあるため作り手、買い手にも求められる品種なのだろう。このような品種がnextコシヒカリに取って代わっていくのか、この2銘柄の広がりや行方が楽しみだ。

島原半島の農業

雲仙火山の活動によって生まれた島原半島全域が「島原半島ユネスコ世界ジオパーク」となっている。雲仙岳は有史以来3回の噴火を起こしており、1792年には「島原大變」と呼ばれる大規模な地殻変動時に噴火を起こし、火山群のいちばん東にある眉山が崩壊。大量の土砂が流れて海岸線を最大800メートル広げ、海に落ちた土砂はやがて数々の小島になった。これが今では生い茂る松が美しい九十九島である。近年では平成2年から7年までの普賢岳噴火で火砕流などの災害をもたらしているが、街は見事に復興を遂げている。また火山の恵みである肥沃な土壌や豊かな湧水などを活かした農業や、泉質が異なる温泉を活かした観光業など、火山と共生した暮らしが営まれている。また、火山について楽しく遊んで学べる体験型ミュージアム「がまだすドーム（雲仙岳災害記念館）」が島原市内にある。火山の恵みにより土壌が肥沃であることから農業が盛んで、長崎県の農業産出額の約4割を島原地域が占めている。大根と人参の輪作体系により安定した生産が行われており、玉ねぎ・レタス・ブロッコリー・アスパラガス・柑橘類・いちごなど多種多様な品目が生産されており、特に長崎県が全国で3番目の生産量を誇る馬鈴薯（じゃがいも）は、その多くが島原半島で生産されている。今はまだ花が咲いていないが、5月の島原半島は馬鈴薯の花が美しい。暖地向け馬鈴薯の品種改良は昭和19年に中国農試でスタートした。馬鈴薯は冷涼気候を好む作物だが、暖地では真夏を避ければ年2回収穫できる。しかし従来の寒地用品種では休眠が長く、種いもの初期肥大に問題が多かった。休眠期間が短く、多収な暖地向けの二期作用の品種育成が当時は切望されていた。昭和25年から島原の愛野試験場に引継がれ今日に至る。島原は古くから種いもの産地で、新しい品種に寄せる農家の期待も大きい。また牛・豚・鶏などの畜産も盛んである。半島は有明海と橘湾に囲まれており、アラカブやタコなどの海産物も特産品になっている。



城下町・島原の歴史は元和4年（1618年）から松倉豊後守重政が7年の歳月をかけて島原城を築いた頃に始まる。城下町のシンボルである城は、五層の天守閣がそびえる本丸を中心に、約4キロメートルにわたって矢挟間（やざま）をもつ塀で取り囲んだ、四万石の大名としては過分ともいえる立派なものだった。島原の乱で一揆軍の猛攻をしのぎ、島原大變時の地震や津波にも耐えてきたが、明治維新を機に解体。現在の城は、昭和39年（1964年）に市民の熱意により復元されたもの。島原はキリシタン文化が栄えた地でもあり、天守閣には島原の乱をはじめ数多くの資料も展示。また、城下に残る武家屋敷や下の丁通りを流れる水路などは、往時のままの面影をとどめている。島原城大手門御前前から半島を一周する島原街道は、参勤交代や領内巡視の藩主、旅人が多く行き交った。往還（殿様道）と呼ばれる街道は、今も石畳をところどころに残し、昔の面影を見ることができる。幕末には坂本龍馬や吉田松陰らも通ったとか。道をたどり、維新志士達の活躍に思いをはせるのも趣がある。是非、5月の連休は島原半島に観光に来てはいかがでしょうか。（福岡支店）



今年のゴールデンウィークは3年振りに様々な制限がない連休となりますね。制限が無いとはいえ、ワクチン接種や事前検査など感染拡大予防策を取った上で旅行や交流を楽しみたいと思います。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>